

## 令和7年度「校内サポートルーム(KSR)研究指定校事業」成果報告書

### 1 指定校・指定校群 (高松市立桜町中学校 KSR-I)

### 2 実施内容

令和6年度に実施した活動及び支援の工夫と、成果・課題を踏まえ、令和7年度は、「選ぶ」「繋がる」「認める」の3つの視点を大切にして、以下のような取組を中心にKSRを運営した。

#### (1) 無理のない・無理強いしない自己決定の継続

生徒は登校後、時間割や行事、KSRに来る予定の教員等をみて、その日の在校時間、給食、参加する授業、KSRで過ごす時間等を自分で計画し、ポートフォリオにまとめる。教員はポートフォリオを見て生徒の状態を掴み、無理のない・無理強いしない支援に当たった。

また、ワンステップ目標として、月初めや学期始めに「KSRの過ごし方(目標)」を考える場面を設定した。

#### (2) 他者の自己決定との折り合いをつける場の重視

誰もが安心して過ごすために、折り合いをつけ、相手を思いやることができるようにするとともに、最終的には「居場所」と「学習の場」のバランスを生徒が自己調整できるようになることを目指した。さらに、多くの教職員や学級の友人と関わる機会を意図的に設けていった。

#### (3) 目的意識を持った進路選択ができるよう意識した支援

進路学習や職場体験学習、教育支援センターの進路説明会、SCによる進路相談をより計画的に活用し、KSR内に、生徒の状態に即したより積極的な進路選択の雰囲気醸成に努めた。また、定期テストに向けて、一人ひとり目標をもたせ、学習に取り組ませるようにした。

#### (4) KSRの一層の環境整備

令和7年度は、KSR専属担任のKSR配置時間を、週14時間で計画した。教室環境や、学習環境については、下記のような工夫をすることで、生徒が自分の居場所であると感じ、安心して過ごせるようにした。

○ 時間割にKSRを担当する教員を示したり、行事や総合的な学習の時間の情報をタイミングよく伝えたりすることで、自己決定に係る選択肢を示し、見通しを持たせる手段の一つとした。

○ 机やパーテーションの配置場所は、利用生徒の状態により、その都度変更していった。

○ 生徒がホワイトボードに描いた絵や文言、特技や興味を生かして作った作品、皆で作ったパズルなどは、そのまま残したり、写真に撮って掲示したりするなど、生活の足跡をKSRに顕在化していくことで、「そこにいてもいい存在」であることの実感を高めるよう工夫した。

#### (5) 教職員間の連携強化と研修

生徒指導委員会・学びの多様化支援委員会等で、個別の状況やKSR全体の様子を共有し、共通理解・共通実践に努めた。SCは、生徒の見立てをKSR専属担任や学級担任に情報提供し、必要な生徒にはカウンセリングを行った。また、SCによる研修も行い、教職員が受容的な態度・理解・対処力の充実に努めた。

#### (6) 不登校生徒の「親の会」との連携

KSR見学会を令和7年度も継続し、保護者の考えや困りごとを把握することで生徒支援の充実と保護者の孤立化予防に努めた。「親の会」の保護者の働き掛けもあり、小学6年生の保護者、児童の参加もあった。

#### (7) 小学校との連携

KSR専属担任をはじめ関係教職員が、本事業を行っている栗林小学校、太田小学校の担当教員同士で情報交換を行った。年間3回行われる小中連絡協議会、夏休みに行われた中学校ブロック合同研修会でSC、SSWを交えて児童生徒の情報交換を行い、長期的な視点を持って支援に取り組むよう努めた。

### 3 成果

#### (1) 校内サポートルームにおける生徒の様子

利用状況は下表のとおりである。

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
登録人数[人]	18	18	21	21	26	26	26	26
授業日数[日]	17	20	21	14	20	22	18	18
累積利用人数[人]	104	125	130	100	142	186	135	128
平均利用人数[人/日]	6.1	6.3	6.2	7.1	7.1	9.3	7.5	7.1
延べ利用時間[時]	356	424	424	314	470	667	453	459

KSR専属担任は、対象生徒と学級担任や教科担任、SC、SSWとをつないだり、生徒を取り巻く周りの人同士の連携を図るためにコーディネートをしたりした。また、生徒同士の関係を構築することも心掛けて支援にあたった。それによって、対象生徒と周りの人とのつながりが生まれていった。

##### ① 生徒と教職員とのつながり

昨年度までの様子を振り返ってみると、個室で過ごしたり、ソファでくつろいでいる生徒がほとんどであった。今年度は、教職員が座っている管理スペースに椅子を持ってきて、輪になり、教員との会話を楽しんだり、勉強をしたりする生徒が増えた。愛情不足など、家庭での保護者との関わりに課題がある生徒も少なくないが、KSRが生徒にとって安心できる場所となったことや教員との関係が良好なことがうかがえる。

また、生徒が登校した際に、学級担任がKSRに来て、進路について話し合う様子も見られ、3年生の生徒は見通しをもって進路選択や受験の準備を行うことができた。さらに、学年団の教員が運動会や合唱コンクールに向けての練習を一緒に行ったり、動画を配信したりすることで、授業や学校行事、職場体験学習に参加できた生徒もあり、生徒は1つのことをやり遂げる充実感や達成感を味わうことができた。

SCは、カウンセリング室でのカウンセリングだけでなく、KSRに出向いて、生徒と話をしたり、学習支援を行ったりした。何気ない会話から生徒の思いを引き出していったことが、心の安定につながった。

## ② 生徒同士のつながり

KSRでともに同じ時間を過ごすことで、学年、性別を越えて生徒同士がつながり、関わりあうようになってきている。中には、周りの様子を見て話したいと思っているものの、なかなか声をかけづらいと感じている生徒もいる。そこで、様子を見ながらKSR専属担任が1人である生徒に声をかけ、協力して制作物を作るなどの機会を設けた。会話をしながら同じことに取り組むことで、互いの悩みを話し、相談に乗る姿も見られた。

## (2) 校内サポートルームにおける活動及び支援の工夫

### ① 生徒の声を大切に学習支援

KSRでは、「自分の過ごし方は自分で決める」自己決定を大切にしているため、自分の好きなことだけをして過ごす生徒や、タブレット端末を離すことができない生徒がいる。生徒は勉強をしなければいけないとわかっているものの、なかなか取り組めないのが現状である。そこで、KSR専属担任が、どのような環境だったら取り組めるか、どのような支援が必要かを生徒と話し合った。生徒からは、「KSRで授業をしてほしい」「一緒に問題を解いたり、互いに教え合ったりしながら取り組みたい」などの意見が出された。KSR専属担任は、生徒の思いを聞きながら、まず、定期テストに向けて目標を設定し、ホワイトボードに書いて明示した。そして、利用人数や一人ひとりの状況を鑑みながら学習支援にあたった。KSR専属担任の専門教科である社会科は、板書をしながら授業を行った。他の教科については、周りの先生方のアドバイスをもとに、わかりやすいワークシートや練習問題を用意し、支援にあたった。

### ② 教職員との連携・協力による活動、支援

KSRの担当教員は、授業時数によって設定しているため、教科に偏りがある。生徒が学習したいという教科の教員にKSR専属担任が依頼をしたり、教科担任が、現在学習している内容を生徒に話して、一緒にやってみないか声をかけたりしていった。生徒は、特に製作活動に興味を示し、家庭科では、被服室に出向いて、ミシンを使ってポーチを作った。自分で布を選び、製作のポイントを聞きながら、丁寧に作業を行った。でき上がったポーチを自慢そうに見せる生徒の姿が印象的であった。

### ③ 他者との関わりにおける課題解決

今年度もKSRが誰もが過ごしやすい場所になるにはどうすればよいか話し合い、その内容をKSR専属担任がホワイトボードにまとめた。その中で、互いのことを知るために「自己紹介シート」を書こうという意見が出て、実践した。生徒は、互いのことを知りたい、他の生徒ともつながりたいと思っていることを教師が知るきっかけとなった。自己紹介シートに書かれた内容が共通の話題となって、会話が生まれている。

## (3) 総括

### ① 課題

- ・誰かと話したい・勉強に気持ちが向かない生徒と、静かに過ごしたい・関わりたくない・関わられたくない生徒など、KSRに求めるものの違いへの対応に引き続き取り組むこと。
- ・特に、言動や他者への関わりに特性を有する生徒と、他の生徒との関係が難しい状況において、専門家の意見も取り入れながら、双方への支援充実を図ること。
- ・学習成果が表れないことで休みがちになる生徒への支援に関して、共通理解を図ること。
- ・常時通室できたり、学校行事や一部の授業に参加できたりする状況にある生徒を、教室復帰にどうつなげていくか、支援の実際について、共通理解を図ること。
- ・年休、出張、未配置等により、KSRに配置する教員が厳しい場合について、共通理解を図ること。

### ② 次年度の見通し

- ・生徒の努力している姿を保護者に発信し、認めてもらうことで、生徒の自己有用感を一層高めること。
- ・定期テスト前に教科担任から対策プリントをもらうなど、より学習に取り組みやすい環境を整えること。
- ・KSR担当だけでなく、特別支援学級担任や学校生活支援員の協力も得ながら、生徒のソーシャルスキルを高める場を創設すること。
- ・SCと学級担任の連携を一層深め、学級の生徒と関わりをもつ機会を意図的に設定していくこと。
- ・「1年生の後半から不登校だったが、3年生の2学期からKSRに登校できるようになり、11月には教室復帰できた生徒」や「個室スペースで過ごしたり、タブレット端末を眺めたりするだけだった生徒が、他の通室生徒や、KSR担当、他の教職員との関わりを通して、笑顔で会話できるようになった生徒」など、成功例について、支援の実際を整理し、知見として共有していくこと。
- ・生徒一人ひとりの過ごしにくさを把握し、生徒が安心して過ごせる環境づくりと柔軟な支援に努めること。